

『鬼平犯科帳』は、実在した四百石の旗本・長谷川平蔵をモデルにした「時代小説」である。

文春文庫（決定版）全二十四巻には、百三十五話（特別長篇五話を含む）が収められている。

原作者の池波正太郎さんは、昭和三十一年頃、江戸幕府の大名や旗本の系譜をまとめた『寛政重修諸家譜』の中の幕臣・長谷川平蔵に興味を引かれたという。

『寛政譜』によると、長谷川平蔵のぶたけは、明和五年（1769年）十二月五日、十代将軍・家治に拜謁し、安永二年（1772年）九月、長谷川家の遺跡を継ぐ。安永三年、西ノ丸書院番を拝命。その後、番士として諸役を歴任。天明六年（1786年）七月、御先手・弓二組の組頭に、天明七年九月十九日、火付盗賊改方の長官に就任する。寛政七年（1795年）五月、五十歳で病没している。

長谷川平蔵は、「天明」から「寛政」にかけて火付盗賊改方をつとめたわけであるが、池波さんは、この短い『寛政譜』の記事をながめては、行間から聞こえてくる長谷川平蔵の家系や人物像、時代背景に思いをはせ、「いずれは…」と、夢を

でも、延々と、糸八が船宿「鶴や」の亭主におさまっているのはどうしたわけなのか。

また、第十六巻・第一話「影法師」に、二百七十余両（約5kg）の盗金を、上州・白石の盗人宿へ運ぶのに馬で運んでいるが、二百七十余両の金なら身に付けて逃

宜以のぶたけ

鍊三郎 平蔵 母は某氏。

明和五年十二月五日はじめて凌明院殿に拜謁し、安永二年九月八日遺跡を継、三年四月十三日西城御書院の番士となり、四年十一月十一日より進物の事を役す。天明四年十二月八日西城御徒の頭に轉じ、十六日布衣を着する事をゆるさる。六年七月二十六日御先弓の頭に遷り、七年九月十九日盗賊追捕の役をつとめ、八年四月二十八日ゆるされ、十月二日よりまたこのことを役す。寛政二年十一月十四日曾てうけたまはりし人足寄場の事精入る、により、時服二領、黄金三枚を賜ひ、四年六月四日これをゆるさる、のときもまた黄金五枚をたまふ。六年十月二十九日とし頃盗賊追捕の役をつとめしにより、時服三領をたまふ。七年五月六日宜以病に罹るのよきこしめされ、懇の御説ありてうちより瓊玉膏をたまひ、十六日追捕の役を辭す。このとき時服二領、黄金三枚をたまふ。十九日死す。年五十。法名日耀。妻は大橋與惣兵衛親英が女。

『鬼平犯科帳』細見

第一回 寛政重修諸家譜

文
松本英亜
text by Hidesugu Matsumoto



走した方が何かと安全で、馬は必要なかったのではないか。さらに、第二十二巻・特別長篇「迷路」に、女賊「お松」が「帯の間にはさんでいた唐棧の煙草入れから、女持ちの銀煙管を引き出して…」という描写があるが、「唐棧の煙草入れ」とはどのようなものなのか…。などなど、「鬼平犯科帳」を局所解剖し、「これは…?!」と、思ったところを独自の観点から細見してみたわけである。

ふくらませて行ったに違いない。

こうして、満を持すこと十数年、『江戸切絵図』や『江戸名所図会』、『江戸買物獨案内』などを駆使して、昭和四十三年、『オール読物』（文芸春秋）一月号に、第一話「啞の十蔵」が発表される。国民的時代小説『鬼平犯科帳』の誕生した瞬間である。

今月から連載されるこのシリーズでは、『鬼平犯科帳』細見」と題して、「とかく、ストーリーばかりを追って見逃ししやすい事柄」「読んでいて、何となく気になる点」「話の辻褄が合わない、整合性がとれない事項」、「実際に、歩いてみたい、舟で行ってみたい原作の舞台」などを採り上げ、詳細な検討を加えてみた。

例えば、第一巻・第六話「暗剣白梅香」のクライマックスで、舞台となる深川・石島町の船宿「鶴や」だが、この事件の後、「鶴や」の亭主・利右衛門（森為之助）は、一年間、ほとぼりをさますため奥さんの故郷・近江へ帰ることになる。長谷川平蔵は、この間、密偵の小房の糸八に「鶴や」をあずけて管理させて置くことにした。ところが、その後、「鶴や」の所有者の利右衛門の消息が全く書かれていないし、江戸へもどって来た様子がない。何年たっ

次号より、第一巻・第一話「啞の十蔵」から順に、前述のような主旨に沿って、毎回テーマをしぼり、「鬼平犯科帳」を「細見」してみることとする。



Profile

1942年東京生まれ。
東邦大学医学部卒業。医学博士。
医療法人社団同友会 顧問。
著書に『小さな旅 鬼平犯科帳ゆかりの地を訪ねて』
第一部～第五部（小学館スクウェア）。